

沖繩南部^{まえしま}前島方言の助詞

新垣 公弥子

はじめに

現代共通語においても、助詞の働きについては、十分明らかにされていない。助詞が構文上重要な働きをしていることは言うまでもないが、構文上どのような働きをしているかということになれば、諸説で異なる。山田孝雄は、助詞を観念語と観念語の関係を示す関係語と捉え、橋本進吉は文節を構成する付属語、時枝誠記は話し手の立場を表現する語と捉え、渡辺実に至っては、実質概念と実質概念の関係を示し、文の成分を構成する関係構成語と捉えている。

このように助詞の捉え方が諸説で異なるのは、助詞が文の構造と密接にかかわっているからである。したがって、助詞の研究は、同時に文の構造をどう捉えるか、という文法上の難問に直面せざるおえない。そのため文の構造をどう考えるかによって、助詞の分類も異なってくることになる。

助詞研究の方法論が確立されていない中であって橋本進吉は助詞を断続の関係、さらに続く場合はどのような語に続くか、そしてどのような語につくかということに基づいて10に分類している。橋本進吉のこのような分類方法は、のちの大野(1987)の研究に有効な方法であった。大野の研究は古語の「の」と「が」に連体用法・主格用法の2つの用法を認め、上代では承ける体言の相違により双方が共存しえたのが、鎌倉期を境に承ける体言が混同を見せると次に「の」と「が」にかかる形式を違え現在に至ることを証明している。橋本進吉の分類方法は古語の「の」「が」の解明に有効であった。そこで本論考では、橋本進吉の分類法に基づき記述した用例を分類していく。

また、琉球方言における助詞の特徴としては古語のように格助詞および連体助詞の各々に[ga] [nu]が認められるということである。これは現代共通語には見られない現象で、大きな特徴の一つとなっている。既述のとおり「が」「の」の双方に格助詞・連体助詞の用法が認められることは橋本(1969)の指摘に始まり、大野(1987)で深められ、琉球方言の分野では内間(1996)に詳しい。

ただ、琉球方言における助詞の研究は、まだ各地域の共時的実態を報告する段階であり野原により、報告が進められているものの十分とは言い難い。本論考では、野原(1983)をも参考にしながら1995年12月から1997年9月までに臨地調査した資料を基に、方法論としては内間(1983)に従い、助詞各々について「承ける形式」「後接する形式」に分類し前島方言の助詞を記述、分類する。

1 調査および分析の方法

調査は1996年12月から1997年9月までに行なった。話者は予備調査・本調査・補助調査を通して喜瀬ヨシ氏で行なった。話者の選出基準は、言語形成期(15歳)を当地で過ごし、

かつ両親・配偶者も当地の出身者であることとした。

調査項目は千葉大学日本語研究室作成したものに基いている。補充の必要な箇所については随時補充を行なった。

採集した用例についての分類および分析については内間（1983）に従った。既述のとおりいわゆる国語においても助詞の捉え方については諸説で異なる。その中において大野（1978）では一定の研究成果をあげている。その理論を琉球方言に応用した内間（1983）は、混沌としていた琉球方言助詞の解明に示唆を与える研究である。本論考では採集した資料を上記の分類方法でまとめていく。

2 助詞概説

1) 助詞の種類

前島方言には以下のような助詞が認められる。

I 準体助詞

[ʃi] (の)

II 並列助詞

[tu] (と) [kara] (から) [tuka] (とか)

III 格助詞

[ga] (が) [nu] (が) [ga] (に) [ŋkai] (に) [ni] (に) [-] (を) [tu] (と)
[ri] (と) [kara] (から) [sa:ni] (で) [ʃi] (で) [ʔuti] (で) [jaka:] (より)

IV 副助詞

[baka:n] (ばかり) [mari] (まで) [nde:] (など) [ʔatai] (くらい)
[na:] (ずつ) [ntʃo:n] (さえ) [jatina] (でも) [ʔussa] (だけ) [ʃika] (しか)

V 係助詞

[ga] (か) [ru] (ぞ) [run] (なんぞ) [n] (も) [ja] (は)

VI 連体助詞

[ga] (の) [nu] (の)

VII 接続助詞

[ne:] (と) [ʃiga] (けれども) [munnu] (ものを) [gana:] (ながら)
[kara] (から) [-i] (て) [tina] (ても) [ʃi:ti] (ごと) [mama] (まま)

VIII 終助詞

[do:] (ぞ) [na] (な) [gaja:] (かしら) [mi] (か) [ga] (か) [ni] (か)
[-i] (か) [ti:] (か) [ba:i] (わけか) [ʃiga] (けど) [mua] (ものを)
[ʃe:] (でしょう) [ja:] (ね) [ji:] (ね) [jo:] (よ) [te:] (よ) [na] (よ)
[sa] (さ)

2) 助詞とその承ける形式および後接する形式

各助詞の承ける形式（助詞の直前にくる形式）と後接する形式（助詞の直後にくる形式）

を中心にその用法をまとめていく。[] は前島方言の語形、「」はいわゆる共通語形、() は方言形に相当する語を示す。また () 内には方言形に相当するいわゆる共通語を、分析可能な限り語の単位で区切って記述しておく。

3 助詞の用法

I 準体助詞

準体助詞として、[ʃi] が認められる。[ʃi] は活用語に後接し、その付いた形式全体を体言的資格のものにする。共通語の準体助詞「の」にほぼ相当するが、「の」と異なるところは、[ʃi] がもっぱら活用語にのみ後接するという点である。いわゆる「の」のように連体詞や体言及び体言相当のものに後接するというのではない。前島方言も同様であるが、これが琉球方言で認められる準体助詞 [ʃi] の特徴である。また [ʃi] はそれ自体、体言的資格をもっており、形式体言的である。従って、文脈によっては「もの」「人」「こと」の意味を表す。

(1) [ʃi] 「の」

(承ける形式)

活用語の準体形

- ?jaː kara tʃitʃu ʃi ga datteːn ?an doː
(あなた から 聞く の が 沢山 ある よ)
- ?ama n niwa ŋkai nagasa ʃi kara
?intʃasa ʃi n datteːm madʒimattoːn
(あそこ の 庭 に 長い の から 短い もの も 沢山 積まれている)
- kunna munoː koːi ʃi ga wassan doː
(こんな ものは 買う の が 悪い よ)
- koːran ʃi ga maʃi roː
(買わない の が いい よ)

(後接する形式)

(a)並列助詞・格助詞・副助詞・係助詞

- kuma ŋkai katʃu ʃi tu jumu ʃi ga ?an
(ここに 書く の と 読む もの が ある)
- kuma ŋkai katʃu ʃi ga ?an
(ここに 書く の が ある)
- ?jaː kara tʃitʃu ʃi ga datteːn ?an doː
(あなた から 聞く の が 沢山 ある よ)
- kunna munoː koːi ʃi ga wassan doː
(こんな ものは 買う の が 悪い よ)

- ?o:sa ʃi ga ?aka: nain
(青い の が 赤く なる)
- tʃikai ʃi baka:m mute: ʃime: sani
(使う の ばかり 持てば よい でしょう)
- kunu matʃija ŋkai ja takasa ʃi n ?are: jassa ʃi n ?an
(この 市場 には 高い の も あれば 安い の も ある)
- katʃu ʃi n wakaran
(書く の も わからない)
- nu: gana kamu ʃi n ?are: ja:
(何 やら 食べる の も あれば な)

II 並列助詞

並列助詞としては、以下のようなものが認められる。

- (1) [tu] 「と」
- (2) [kara] 「から」
- (3) [tʃka] 「とか」

別個で対等の概念を結びつける働きがある。別個であるがゆえに先行概念と後行概念の交替が可能である。

- (1) [tu] 「と」

体言や体言相当のもの及び準体助詞 [ʃi] 「の」に後接して、それらを対等の関係で列挙する。

(承ける形式)

(a) 体言および体言相当語

- ?ja: tu wan tu mandʒun ?itʃua
(あなた と 私 と 一緒に 行く)
- haru ŋkai ?mma tu ?uʃi ga wua
(畑 に 馬 と 牛 が 居る)
- ?amma: tu wan tu wun do:
(お母さんと 私 と 居る よ)
- ?uʃi:mi: ne: warabi tu ?mmaganutʃa: tu jaratʃan
(御清明 には 子供 と 孫達 と 行かした)
- wu:n tu nukudʒiri tu sa:ni ki: tʃi:n
(斧 と 鋸 と で 木 切る)
- wi: tu ʃitʃa ndʒi ?aʃibua
(上 と 下 で 遊ぶ)
- kuri tu kure: dʒiru ga takasa ga
(これ と これは どれ が 高い か)

• ta:tʃi tu mi:tʃi ŋkai waki:n

(二つ と 三つ に 分ける)

(b)副助詞・準体助詞

• ?itʃa gana: tu ke:i gana: juin

(行き ながら と 帰り ながら 寄る)

• kuma ŋkai katʃy ʃi tu jumu ʃi ga ?an

(ここに 書く の と 読む の が ある)

(後接する形式)

(2) [kara]「から」

格助詞「から」からの転成したものである。同趣の事柄が他にもあることを言外しつつそれらの中からいくつかを例示的に起点の形で列挙する。体言、準体助詞に後接するが用例は少ない。

(承ける形式)

(a)体言

• ?ama: ?iŋ kara maja: kara tʃikanato:n

(あそこは 犬 から 猫 から 飼っている)

(b)準体助詞

• ?ama nu niwa ŋkai nagasa ʃi kara

?intʃasa ʃi n datte:m madʒimatto:n

(あそこ の 庭 に 長い の から 短い の も 沢山 積まれている)

(後接する形式)

(a)体言

• ?ama nu ja: ja ?uʃuttʃy kara warabi mari datte:n wun do:

(あそこ の 家 は 大人 から 子供 まで たくさん 居る よ)

(b)活用語の接続形

• ?ama nu niwa ŋkai nagasa ʃi kara

?intʃasa ʃi n datte:m madʒimatto:n

(あそこ の 庭 に 長い の から 短い の も 沢山 積まれている)

• ?wa: kara ʃi:ra: kara tʃikanatan do:

(豚 から 山羊 から 養った よ)

(3) [tuka]「とか」

事、物、動作、状態などを例示的に並べあげるのに用いる。

(承ける形式)

体言

• ?wa: tuka ʃidʒa: tuka tʃikanatan do:

(豚 とか 山羊 とか 養う よ)

(後接する形式)

(a)体言

- ?ama nu ja: ja daki tuka tamun tuka madʒimatto:n
(あそこの家は竹とか薪とか積んである)

(b)活用語の終止形

- ?aka: tuka tʃi:ru: tuka ?an do:
(赤とか黄色とかあるよ)

III 格助詞

格助詞として認められるものには、以下のようなものがある。

- (1) [ga] 「が」 (主格)
- (2) [nu] 「が」 (主格)
- (3) [ga] 「に」 (目的)
- (4) [ŋkai/kai] 「に」 (方向)
- (5) [ni] 「に」 (帰着点)
- (6) [—] 「を」 (目的)
- (7) [tu] 「と」 (共同の相手)
- (8) [ri] 「と」 (引用)
- (9) [kara] 「から」 (起点)
- (10) [sa:ni] 「で」 (手段・方法)
- (11) [ʃi] 「で」 (手段・方法)
- (12) [?uti] 「で」 (場所)
- (13) [jaka:] 「より」 (比較対照の基準)

これらの助詞は () に示したような意味関係でもって、事柄と事柄の論理的関係、すなわち格関係を表す。以下、各々の助詞について用例を示しながら見ていくことにする。

(1) [ga] 「が」 (主格)

「ガ」は動作・作用を行なう主体、または性質・状態(情態)を有する主体を表す。いわゆる主格を表す。[ga] は基本的には人称代名詞、「事物」を表す代名詞、呼称としての親族語彙、あるいは人名などに後接する。

(承ける形式)

(a)体言

- ?ja: ga ?itʃu mi
(あなたが行くか)
- gasa gasa ʃi ?utu ga sʉtan
(ガサガサして音がした)

(b)準体助詞・副助詞

- ko:i ʃi ga wassan do:
(買うのが悪いよ)

• ko:ran }i ga ma}i ro:

(買わない の が よい よ)

• ki: ŋkai tui nu }i: baka:ŋ ga ?a ssa:

(木 に 鳥 の 巢 ばかり が ある よ)

(後接する形式)

(a)体言

• midzi ga ko:ri nain

(水 が 氷 なる)

(b)活用語の準体形・終止形・接続形

• wa: ga ?it}u sa

(私 が 行く さ)

• ?ari ga ?it}un do:

(あれ が 行く よ)

• ?amma: ga ?nd}iku:wa nri ?it}o:tan

(お婆さん が 行って来い と 言っていた)

(2) [nu] 「が」 (主格)

[nu] は古語の「の」に対応するもので、[ga] と同様、動作・作用を行なう主体または性質・状態 (情態) を有する主体を表す。文法的には主格を表すことになる。[nu] は [ga] と異なり、基本的には「場所」を表す代名詞や普通名詞及び体言相当のものなどに後接する。

(承ける形式)

(a)体言

• ?ami nu }u}ti mit}e: ka:ra nato:n

(雨 が 降って 道は 川 になっている)

• }inamun nu jassaru t}kuma ŋkai ?at}imain

(品物 が 安い 処 に 集まる)

(後接する形式)

(a)活用語の接続形・連体形

• ?ami nu }u}ti mit}e: ka:ra nato:n

(雨 が 降って 道は 川 になっている)

• }inamun nu jassaru t}kuma ŋkai ?at}imain

(品物 が 安い 処 に 集まる)

また、上記に示した格助詞 [ga] [nu] の両方を許容する例がある。以下に示す。

• wata nu jamu ssa:

ga

(腹 が 痛い さ)

- ʧisa nu jari ʔakkaran
ga
(足 が 痛くて 歩けない)
- jama neː habu nu wun doː
ga
(山 には ハブ が 居る よ)
- dʒin nu ratteːn ʔaa
ga
(金 が 沢山 ある)
- ʔami nu ratteːn ʔuin roː
ga
(雨 が 沢山 降る よ)
- kiː nu karitoː ssaː
ga
(木 が 枯れている さ)
- namaː ʃigutu nu ratteːn ʔaa
ga
(今は 仕事 が 沢山 ある)
- ʔwaː tu ʧiːdʒaː nu wun doː
ga
(豚 と 山羊 が 居る よ)

このように前島方言の [nu] は格助詞として主格の用法がある。VI連体助詞の項で後述するが、[ga] には格助詞としての主格用法以外に連体助詞として連体修飾の職能もある。これが琉球方言全体に見られる大きな特徴であり、共通語のそれとは異なる。

(3) [ga] 「に」(目的)

動詞の連用形に後接して、述語の表す動作の目的を表す。

(承ける形式)

活用語の連用形

- jaːjeː koːi ga ʔitʃua
(野菜 買い に 行く)
- ʔumi kai ʔaʃibi ga ʔitʃua
(海 に 遊び に 行く)

(後接する形式)

活用語の終止形

- haru kai ʔmmu ʔui ga ʔitʃua
(畑 に 芋 堀 に 行く)

(4) [ɲkai/kai] 「に」(方向)

動作・作用の帰着する目標を表す。

(承ける形式)

(a)体言

- ʔuja ɲkai dʒin ʔukuina
(親 に 金 送る)
- wakasaru tukeː ʔuja ɲkai kuntʃikaːtti
(若い 時は 親 に こき使われて)
- ʔinu ɲkai kuːratti
(犬 に 喰われて)
- midʒi ɲkai ʔmburitan
(水 に 溺れた)
- kunu kwaːʃeː miːtʃi ɲkai wakiːn
(この 菓子は 三つ に 分ける)

(b)副助詞

- kunu kutoː ʔjaː bakaː ɲkai naraːsun
(この ことは あなた ばかり に 教える)
- ʔammaː ja ʔari bakaː ɲkai ʃimiːn
(お母さんは あれ ばかり に させる)
- kureː ʔjaː nakaː nu ɲkai hanaʃi sun doː
(これは あなた だけに 話 する よ)

(後接する形式)

(a)活用語の接続形・命令形・終止形

- ʔwiː ɲkai ʔutʃoːkeː
(上 に 置いておけ)
- kuma ɲkai kuːwa
(ここ に 来い)
- nami ɲkai nagasattan
(波 に 流された)

(b)体言

- kiː ɲkai tui nu ʃiː bakaːŋ ga ʔa ssaː
(木 に 鳥 の 巢 ばかり が ある さ)
- haru ɲkai ʔoːʃa wiːn
(畑 に 青葉 植える)

動作・作用の帰着する目標を表す [ɲkai] は「～(に)向かい」[mukai] からの変化である。mukai>mkai>ɲkai が考えられるが、さらに [kai] の形も観察できる。

- ?are: tʃa: ?umi kai ru ?itʃun do:
(あれは いつも 海 に ぞ 行く よ)
- sui kai ?itʃua
(首里 に 行く)
- ?umi kai ?itʃua
(海 に 行く)

以上に示した以外にも多くの用例が収集できたので以下に示しておく。

- warabe: ja: ŋkai wun do:
(子供は 家 に 居る よ)
- jamatu ŋkai ?itʃua
(大和 に 行く)
- kundʒan jambaru ŋkai ?itʃua
(国頭 山原 に 行く)
- kwa:ʃe: muru ttʃu ŋkai kwitan
(菓子は みな 人 に あげた)
- ?inu ŋkai ti: ku:rattan
(犬 に 手 噛まれた)
- ?ami ŋkai nritan
(雨 に 濡れた)
- kunu kkwa: ?uja ŋkai nitʃo:n
(この 子供は 親 に 似ている)
- watta: ja: ja ?umi ŋkai tʃikasan
(私達 家 は 海 に 近い)
- ?usure: ja ?anu ttʃu ŋkai ?adziki:n
(香典 は あの 人 に 預ける)
- ʃiguto: jattʃi: tu ?uttu ŋkai ʃimi:n
(仕事は 兄 と 弟 に させる)
- haku nu na:ka ŋkai ?iri:n
(箱 の 中 に 入れる)
- ?m:me: ja mannaka ŋkai ʃiʃi:n
(お婆さんは 真ん中 に 坐らせる)
- ti: ŋkai kidʒi tʃiki:n
(手 に 傷 付ける)
- haru ŋkai ja:ʃe: ?ui:n
(畑 に 野菜 植える)
- ni:ke: ŋkai nubuin
(二階 に 登る)

- matʃigwaː ŋkai ʔiʃua
(市場 に 行く)
- ʔumi tu haru ŋkai ʔitʃua
(海 と 畑 に 行く)

(5) [ni] 「に」 (帰着点)

[ni] は本質的には動作・作用の帰着するところを表す。それが文脈により、帰着点をも含めて種々の意味を表すようになる。

(承ける形式)

体言

- ʔumi ni ʔitʃua
(海 に 行く)
- kundʒan jambaru ni ʔitʃua
(国頭 山原 に 行く)
- dokudʒi ni ʔukiːn
(六時 に 起きる)
- ʔanu warabeː ʔisa ni natan
(あの 子供は 医者 に なった)

(後接する形式)

活用語の未然形・接続形・終止形

- ʔammaː ni nuraːttan
(お母さん に 怒られた)
- kadʒiɸytʃaː ni ʒiːtubasattan
(台風 に 飛ばされた)
- ʔatʃimai ni ttʃi n ʔareː heːku keːin
(集まり に 来て も あれは 早く 帰る)
- gumaːsoːi ni ʔubitan
(小さい時 に 覚えた)

(6) [—] 「を」 (目的)

目的格はゼロで表示される。いわゆる共通語の「を」にあたる形式は見出せない。形として表さなくても、目的格の関係は自明なのである。

- ʔjuː koːtan
(魚 買った)
- ʔmaga ŋkai dʒiŋgwaː kwitan
(孫 に 小遣い あげた)
- wuːn saːni kiː tʃiːn
(斧 で 木 切る)
- munu kamua
(ご飯 食べる)

- ?inu ŋkai tiː kuːrattan
(犬 に 手 噛まれた)
- tiː ŋkai kidʒi tʃikiːn
(手 に 傷 付ける)
- ?jaː ja taː kameːtoː ga
(あなた は 誰 探している か)

(7) [tu] 「と」 (共同の相手)

[tu] は動作・作用の相手・共同者、比較の対象などとの関係を表す。

(承ける形式)

(a)体言 (動作・作用の相手・共同者)

- sui kai ?uja tu mandʒun ?ndʒan
(首里 に 親 と 一緒に 行った)
- ŋkaʃi tu tʃigati muru ?utʃikawatoːn
(昔 と 違って みな 変わっている)

(b)副助詞

- kunu ?mmagaː tammeː bakaːn tu ?aʃibua
(この 孫は お爺さん ばかり と 遊ぶ)

(後接する形式)

活用語の終止形

- duʃigwaː tu ?aʃibua
(友達 と 遊ぶ)
- ?uʃiːmiː neː warabi tu ?mmaganutʃaː tu jaratʃan
(清明祭 には 子供 と 孫達 と 行かせた)

(8) [ri] 「と」 (引用)

琉球方言では「動作・作用・状態などの内容」は [ri] で表される。

(承ける形式)

(a)活用語の終止形

- ?ari ga ?itʃun ri ?iːtan doː
(あれ が 行く と 言っていた よ)

(b)体言

- tʃirutʃan di ?iːru naː ru jan doː
(鶴ちゃん と 言う 名前 ぞ である よ)

前島方言では音韻上 /r/ と /d/ は自由交替の関係にあるがここでは具体音声として [ri] と [di] とを区別して記述しておく。

(後接する形式)

活用語の終止形・接続形・duの結び

- kureː maːsan di ?umuia
(これは 美味しい と 思う)

- ?ari ga ?it}un ri ?i}tan do}

(あれ が 行く と 言っていた よ)
- t}irut}an di ?i}ru na} ru jan do}

(鶴ちゃん と 言う 名前 ぞ である よ)

(9) [kara] 「から」 (起点)

[kara] は本質的には動作・作用の起点を表す。それが文脈によって、次のように起点も含めて、種々の意味を表すようになる。

(承ける形式)

(a)副助詞・準体助詞・格助詞

- kaŋko}nind}o} jamatu baka}ŋ kara t}u}n

(観光客は 大和 ばかり から 来る)
- kat}u }i kara had}imire}

(書く こと から 始めろ)
- ?it}i ni kara ?i}u}na} jatan

(行く時 に から 変 だった)
- ?anu tt}o} wakasai ni kara kawato}tan

(あの 人 は 若い時 に から 変わっていた)

(b)体言

- kisa} kuma kara tu}in do}

(汽車は ここ から 通る よ)
- muno} ?ja} kara sat}i nati kame}

(ものは あなた から 先 なって 食べる)
- wanne} ?asa kara juru mari hatarat}ua

(私は 朝 から 夜 まで 働く)
- warabe} du} kara hanasuna jo}

(子供は 体 から 放すな よ)
- jamatu ŋkai }uni kara ?it}un

(大和 に 舟 から 行く)
- tamme} ha}ma kara ?att}o}tan

(お爺さんは 浜 から 歩いていた)
- bo} }i ŋ kandaŋ gutu }uka kara ?att}o} sa

(帽子 も 被らない で 外 から 歩いている さ)
- kunu t}ino} ja} kara t}ija}

(この 着物 は 家 から 着るもの)

(後接する形式)

(a)係助詞

- sake} kumi kara ru t}u}kuin do}

(酒 は 米 から ぞ 作る よ)

- warabi m magi: naja: ni ?uja kara n hanarito:n
(子供 も 大きくなつて 親 から も 離れている)

(b)活用語の接続形・終止形・連用形

- ?uka kara ke:ti tʃi:ne: ti: tu ʃisa kara ?arare:
(外 から 帰つて 来たら 手 と 足 から 洗え)
- ?ura kara ?ittʃi ku:wa
(裏 から 入つて 来い)
- ?o:je: ʃi ?unniŋ kara ku:n sa:
(喧嘩 して その時 から 来ない さ)
- ?uja kara n:dʒine: nama warabi
(親 から 見れば まだ 子供)

(c)体言

- haru kai ?ndʒi kara katabaru ŋkai ?itʃua
(畑 に 行つて から 海 塩田 に 行く)
- ?uʃuttʃu kara warabi mari muru ?atʃimain
(大人 から 子供 まで 皆 集まる)
- guma: kara ?o:je: ga hadʒimain
(些細なこと から 喧嘩 が 始まる)

(10) [sa:ni] 「で」(手段・方法)

[sa:ni] は手段・方法を表す。

(承ける形式)

体言

- ki: ga kadʒi sa:ni to:ri:n
(木 が 風 で 倒れる)
- ?uri sa:ni katʃua
(筆 で 書く)

(後接する形式)

(a)係助詞

- ti: sa:ni ru ka:mi ja tʃikuiru
(手 で ぞ 瓶 は 作るのだ)

(b)活用語の終止形

- sake: kumi sa:ni tʃykuin
(酒は 米 で 作る)

(c)体言

- wun tu nukudʒiri sa:ni ki: tʃi:n
(斧 と 鋸 で 木 切る)

(11) [ʃi] 「で」(手段・方法)

[ʃi] は手段・方法を表す。

(承ける形式)

準体助詞・副助詞

• ?ai ʃi ʃi tʃikuin
(ある の で 作る)

• ti: baka:n ʃi ru tʃikuin do:
(手 ばかり で ぞ 作る ぞ)

(後接する形式)

活用語の終止形・命令形

• kʷe: nu ?atai ja ru: ʃi nain
(食べる の くらい は 自分 で できる)

(12) [?uti] 「で」(場所)

琉球方言では「手段・方法」などを表す助詞と「動作・作用の行なわれる場所」を表す助詞は、各々異なる語形で表れる。動作・作用の行なわれる場所は [?uti] で表される。

(承ける形式)

(a)体言

• ?umi ?uti ?i:dʒua
(海 で 泳ぐ)

(後接する形式)

(b)活用語の終止形

• gumasaine: ka:ra ?uti ?aʃiraa
(小さい時には 川 で 遊んだ)

(13) [jaka:] 「より」(比較対照の基準)

(承ける形式)

体言

• natʃi jaka: \emptyset ujo: maʃi
(夏 より 冬は よい)

• ʃiʃi jaka: ?ijo: takasan
(肉 より 魚は 高い)

• ?ari jaka: ?ja: ga ?itʃuʃi ga maʃi
(あれ よりか あなた が 行くの が よい)

(後接する形式)

(a)体言

• kunu kʷsa: ?uma jaka: ʃi:dʒa: ga ju: kamua
(この 草は 馬 よりか 山羊 が よく 食べる)

(b)活用語の連用形・接続形

• natʃuʃi jaka: waraiʃe: maʃi
(泣くの よりか 笑うのは よい)

- ?ndʒaru baː ʒakaː ?aritoː ssaː
(行った 時 より 荒れている さ)

IV 副助詞

副助詞としては次のようなものが認められる。

- (1) [bakaːn] 「ばかり」(限定)
- (2) [mari] 「まで」(到達点)
- (3) [ndeː] 「など」(例示)
- (4) [ʔatai] 「くらい」(程度)
- (5) [naː] 「ずつ」(等量の数量・割合・分割)
- (6) [ntʰoːn] 「さえ」(特殊な場合の例示)
- (7) [ʒatɪn] 「でも」(例示)
- (8) [ʔussa] 「だけ」(範囲の限定)
- (9) [ʒika] 「しか」(限定)

(1) [bakaːn] 「ばかり」

体言、格助詞、準体助詞などについて次のように用いられる。

(承ける形式)

(a)体言または体言に準ずる語

- ?ami bakaːn ʰutoːn
(雨 ばかり 降っている)
- saki bakaːn numua
(酒 ばかり 飲む)
- ?anu warabeː sumutʃi bakaːn juroː saː
(あの 子供は 書物 ばかり 読んでいる さ)
- ?itʃiri bakaːn ?attʃa ssaː
(一里 ばかり 歩いた さ)
- kiː ŋkai tui nu ʃiː bakaːn ru ?a ssaː
(木 に 鳥 の 巢 ばかり ぞ ある さ)

(b)格助詞・準体助詞

- wanneː ?obaː tu bakaːn ?aʃibua
(私 は お婆さん と ばかり 遊ぶ)
- tʃikai ʃi bakaːm muteː ʃimeːsani
(使う もの ばかり 持てば いいでしょう)

(後接する形式)

(a)格助詞・係助詞・連体助詞

- wanneː ?obaː bakaːn tu ?aʃibua
(私 は お婆さん ばかり と 遊ぶ)

- nukuiru muno: maja: baka:n ga kwain
(残るものは 猫 ばかり が 喰う)
- ?uttunut}a: baka:n du wun do:
(弟達 ばかり ぞ 居る ぞ)
- katat}i baka:n nu ?ujuwe: saa
(形 ばかり の お祝い した)

(b)体言

- ja: nu kutu baka:n }iwa sun do:
(家 の こと ばかり 心配 する よ)

(c)活用語の終止形・接続助詞

- ?anu ?ikiga: wam baka:n n:t}o:n
(あの 男は 私 ばかり 見ている)
- sa}go: baka:n ?uti kwire:
(三合 ばかり 売って くれ)
- saki baka:n nure: naran do:
(酒 ばかり 飲んで は ならない よ)

(2) [mari]「まで」

体言、代名詞、格助詞、活用語などに後接して次のように用いられる。

(承ける形式)

(a)体言

- ?ja: kwi: ja haru mari t}ikari:n
(あなた 声 は 畑 まで 聞こえる)
- me:d}ima kara tumai mari mit}e: }iruku nain
(前島 から 泊 まで 道は 広く なる)
- ?ami nu }uto:ta }iga kad}i mari }ut}o:n
(雨 が 降っていた けれども 風 まで 吹いている)

(b)格助詞

- naiso jata }iga ?uja ni mari ?it}o:n
(内緒 であった けれど 親 に まで 言っている)

(c)活用語の連体形

- ?ja: ga kat}uru mare: matt}o:t}ua
(あなた が 書く までは 待っておく)
- wa: ga ?it}uru mari n ?ika}ke:n di tumi:n
(私 が 行くの まで も 行くな と 止める)

(後接する形式)

(a)係助詞

- wa: ga ?it}uru mari n ?ika}ke:n di tumi:n
(私 が 行くの まで も 行くな と 止める)

• ninto:ru warabi mari n so:ti ?it\un do:
(眠っている 子供 まで も 連れて 行く よ)

• kuruma ŋkai ?im mari n nuʃi:n do:
(車 に 犬 まで も 乗せる ぞ)

(b)活用語

• ?ja: mare: ?ikaŋke:
(あなた までは 行くな)

• ?ja: mari ?it\un na:
(あなた まで 行く のか)

[mari] が助詞の [ja] (は) に接すると [j] が脱落し、[i] と [a] 母音が融合し [mare:] となる。

• warabi ŋkai saki mare: numasaŋke:
(子供 に 酒 までは 飲まないでおけ)

• ?ja: mare: ?ikaŋke:
(あなた までは 行くな)

• ?n:gutu mare: san tin ʃime:sani
(このように までは しなく ても いいでしょう)

(3) [nde:] 「など」

体言、格助詞などについて、ある事物をそれだけに限定せず、例えばといった気持ちで例示的に示す。

(承ける形式)

(a)体言

• tabaku nde: ŋukuna jo: ja:
(煙草 など 噴くな よ ね)

(b)格助詞

• ?ari ga nde: dʒo:i ?ikan do:
(あれ が など 絶対 いかない よ)

(後接する形式)

(a)活用語の未然形・連用形・命令形

• dakug aki nde: saŋke:
(落書 など するな)

• warabi nu saki nde: ko:ine: naran do:
(子供 が 酒 など 買っては ならない ぞ)

• tʃa: nde: nume:
(茶 など 飲め)

(b)体言

• ʃibaja nde: ru: tʃui ?ikari:n
(芝居 など 自分 一人 行ける)

(4) [ʔatai] 「くらい」

代名詞に後接して、おおよその程度を表す。

(承ける形式)

代名詞

- ʔanu ʔatai jareː waː ga n naina
(あの くらい であれば 私 が も できる)

(5) [naː] 「ずつ」

副助詞、活用語、体言に後接して等量の数量・割合・分割などを表す。

(承ける形式)

(a)副助詞

- kureː tʃassa bakaːn naː su ga
(これは いくら ばかり ずつ する か)

(b)副詞

- kunten naː kajaːʃeː
(少し ずつ 運べ)
- ʔuʃigwaː naː jatiŋ kaŋgeːti kwireː
(少し ずつ であっても 考えて くれ)

(c)体言

- ʔikʉtʃi naː ŋkai wakiː ga
(いくつ ずつ に 分ける か)
- kunu kwaːʃeː tʃassa naː wakiː ga
(この 葉子は いくつ ずつ 分ける か)

(後接する形式)

(a)格助詞

- kunu kwaːʃeː ʔikʉtʃi naː ni wakiː ga
(この 葉子は いくつ ずつ に 分ける か)
- ʔikʉtʃi naː ŋkai wakiː ga
(いくつ ずつ に 分ける か)
- tʃappi naː tu keːta ga
(どれくらい ずつ と 変えた か)
- miːtʃi naː tu keːtan
(三つ ずつ と 変えた)

(b)活用語の準体形

- kureː tʃassa bakaːn naː su ga
(これは いくら ばかり ずつ する か)
- kunu kwaːʃeː tʃassa naː wakiː ga
(この 葉子は いくつ ずつ 分ける か)

(6) [ntʃoːn / ntʃon] 「さえ」

[ntʃoːn] は体言、格助詞などに後接して次のように用いられる。なお長音が短縮され [ntʃon] になる場合もある。

(承ける形式)

(a)体言

- tʃaː ntʃoːn numaŋ gutu ʔitʃutan
(茶 さえ 飲まず 行った)
- ʔareː dʒiː ntʃoːŋ kakan
(あれは 字 さえ 書かない)

(b)格助詞

- jinagu nu ntʃoːn nairu munnu jikiga nu narantʃi ʔain na
(女 が さえ できる のに 男 が できないって ある か)
- kureː majaː ga ntʃoŋ kwaːn
(これは 猫 が さえ 喰わない)
- ʔanu ttʃoː tʃikaku ŋkai ntʃoːn ʔattʃeː ʔikan
(あの 人は 近く に さえ 歩いて 行かない)

(後接する形式)

活用語の終止形・連用形・未然形・接続形・命令形・条件形

- ʔareː meːnatʃi jaː ŋkai ntʃoːn wuran
(これは 毎日 家 に さえ 居ない)
- waː ga ntʃon nain doː
(私 が さえ 出来る ぞ)
- kuri ntʃoːn wuineː taʃikai sa
(これ さえ 居れば 助かる さ)
- terebi ntʃon nːdan doː
(テレビ さえ 見ない ぞ)
- dʒiː ntʃoːŋ katʃeː neːn
(字 さえ 書いて いない)
- karadʒiː ntʃoːn juːreː
(髪の毛 さえ 結え)
- niku ntʃoːn niːreː ʃimun teː
(肉 さえ 煮れば いい よ)

(7) [jatin] 「でも」

(承ける形式)

(a)体言

- tʃaː jatin ʔusagareː
(茶 でも お召し上がり下さい)

- wanneː jaː jambaru jatin ʔikarin doː
(私はね 山原 でも 行かれるぞ)

(b)格助詞

- kunu ʃigutu jareː waː ga jatin nain doː
(この 仕事 であれば 私が でも 出来るぞ)
- jambaru kai jatin ʔikarin doː
(山原 に でも 行かれるぞ)

(後接する形式)

活用語の未然形・終止形

- warabi jatin ʔikariːn doː
(子供 でも 行かれるぞ)
- kunu ʃigutu jareː waː ga jatin nain doː
(この 仕事 であれば 私が でも 出来るぞ)

(8) [ʔussa]「だけ」

動作をそれだけに限定する。

(承ける形式)

活用語の連体形

- kamuru ʔussaː dʒinoː muttʃoːn
(食べる だけは 金は 持っている)

(後接する形式)

(a)活用語の終止形

- tiː ŋkai mutariru ʔussa mutʃua
(手 に 持てる だけ 持つ)

(b)体言

- kamuru ʔussaː dʒinoː muttʃoːn
(食べる だけは 金は 持っている)

(9) [ʃika]「しか」

主体あるいは動作をそれだけに限定する。

(承ける形式)

格助詞

- waː ga ʃika naran
(私 が しか 出来ない)

(後接する形式)

(a)活用語の未然形

- nidʒiri kara ʃika ʔikaran
(右 から しか 行けない)

V 係助詞

係助詞としては次のようなものが認められる。

- (1) [ga]「か」(自問)
- (2) [ru]「ぞ」(強調)
- (3) [rua]「なんぞ」
- (4) [n]「も」(事情の類似したものが他にもあることを言外に示しつつ、ある事柄を取り立てる)
- (5) [ja]「は」(他と区別して取り立てる)

係助詞には主に次のような3つの職能がある。①文中で用いられ、強調・疑問・反語などの意味を表し、これを承けて文を結ぶ用言に影響を与える②文末に用いられ感動・命令・疑問・反語・希望・打消などの意味を表し、文の成立を助ける働きをする。③係助詞は格助詞の代わりに格関係を表示するために用いられることがある。以下具体的に見ていく。

(1) [ga]「か」(自問)

[ga] は、格助詞、疑問詞に後接し自問の意味を表す。[ga] を承けた文末は [-ra] の形で呼応関係を示す。琉球方言の多くで、係り結びの用法が見出せる。

(承ける形式)

格助詞

- jamato: ʔitʃi kara ga ʃi:ku naira ja:
(大和は 何時 から か 寒く なるのか ね)
- nu: nu ga ʃirumasara n:tʃo: sa
(何 が か 珍しいのか 見ている さ)
- ta: ga ga tʃurasara wakaran
(誰 が か きれいのか 分からない)

(後接する形式)

活用語のgaの結び形

- ta: ga ga tʃimugurisara wakaran
(誰 が か 可哀相なのか 分からない)
- dʒiru ga ga ʔmbusara: wakaran
(どれ が か 重いのか 分からない)

また格助詞の代わりに格関係を表示する用例が認められた。

- nu: ga wukasara warato:n
(何 か 可笑しいのか 笑っている)
- du: ga kytʃisara juky to:n
(胴 か 苦しいのか 休んでいる)

(2) [ru]「ぞ」(強調)

体言、代名詞、副助詞、格助詞などに後接し、強調の意味を表す。[ru] は [ru -ru (連対形)] の呼応関係を示すが、破格の用例も多く見出せる。

係助詞の [ga] と [ru] は係り結び消滅の問題を考える上で重要な助詞である。改めて

機会を設け論じて行く。

(承ける形式)

(a)体言

- ?ja: ja kuri ru Çirumasaru i
(あなた は これ ぞ 珍しいの か)
- t{inu: jaka: tt{u: ru ?at{isan do:
(昨日 よりか 今日 ぞ 暑い ぞ)
- ?ari jaka: kuri ru takasan do:
(あれ よりか これ ぞ 高い ぞ)

(b)格助詞・副助詞

- mu:t{i: nu Çit{i ni ru Çi:saru
(鬼餅 の 時季 に ぞ 寒いのだ)
- mu:t{i: nu Çit{i ni ru Çi:san do:
(鬼餅 の 時季 に ぞ 寒い ぞ)
- ki: ŋkai tui nu {i: baka:n ru ?a ssa:
(木 に 鳥 の 巢 ばかり ぞ ある さ)

(後接する形式)

活用語のduの結び形・終止形・準体形

- ?ari ru Çirumasaru
(あれ ぞ 珍しいのだ)
- t{inu: jaka: t{u: ru ?at{isaru mun na:
(昨日 よりか 今日 ぞ 暑い ものを な)
- kuri jaka: ?ari ru takasan do:
(あれ よりか これ ぞ 高い ぞ)
- ?ja: ja kuri ru Çirumasa mi
(あなた は これ ぞ 珍しい のか)

(3) [rua]「なんぞ」

体言、活用語に後接し、取り立ての意味を表す。

(承ける形式)

(a)体言

- ju:g wa: run numine: no:i sa
(お湯 なんぞ 飲めば 治る さ)

(b)活用語

- jatt{i: jatin wui run {e: {imu {iga ja:
(兄 でも 居 なんぞ すれば よい けど ね)

(後接する形式)

活用語の連用形・条件形

• dʒi: ruŋ katʃi ju: sure: ja:

(字 なんぞ 書き きれれば な)

• ?ja: ga katʃi run ʃe: taʃikai sa

(あなた が 書き なんぞ すれば 助かる さ)

(4) [n]「も」(取り立てる。)

体言、準体助詞、格助詞、活用語などに後接し、取り立てる。

(承ける形式)

(a)体言

• ?ami n ɸuto: ʃiga kadʒi n ɸutʃo:n

(雨 も 降っている けれど 風 も 吹いている)

• hana n satʃo:n

(花 も 咲いている)

(b) 格助詞・準体助詞

• ?uppe: warabi nu n wakain do:

(これくらいは 子供 が も 分かる ぞ)

• tui nu ŋ kwain

(鳥 が も 喰う)

• katʃu ʃi n wakaran

(書く もの も 分からない)

(c)活用語の接続形

• ?atʃimai ni ttʃi n ?are: he:ku ke:in

(集まり に 来て も あれば 早く 帰る)

(後接する形式)

活用語の終止形・接続形

• wa: ga n nain

(私 が も 出来る)

• wan jaka ɸuka: ta: n wuran

(私 より ほかは 誰 も 居ない)

• waki:ru kʉtu n nain

(分ける こと も 出来る)

• ?ami nu ɸutʃika n tʃidʒitʃo: ssa:

(雨 が 二日 も 続いている さ)

(5) [ja]「は」(他と区別して取り立てる)

(承ける形式)

(a)格助詞

• ?ama ŋkai ja ?araŋ kuma ŋkai ru wuru

(あそこ に は でない ここ に ぞ 居のだ)

- ?watta: ja: ŋkai ja ne:n
(私達の 家 に は ない)
- wanne: ?ama kai ja ?uturusa nu ?ikan do:
(私は あそこ に は 恐ろしい ので 行かない ぞ)
- ?ama kai ja ?at{a: ?ike:
(あそこ に は 明日 行け)
- tiŋ kara ja tui nu ru tuburu
(空 から は 鳥 が ぞ 飛ぶのだ)

(b)体言

- de: ja takaku nato:n ja:
(代金 は 高く なっている ね)
- t{u: ja ŋi:ko: ne:n
(今日 は 寒く ない)
- ?ja: ja kuri ru ŋirumasa mi
(あなたは これ ぞ 珍しい か)
- hadʒikasaru ba: ja ?aka: naina
(恥ずかしい 場合 は 赤く なる)

(後接する形式)

活用語の準体形・連用形・終止形

- ju:ri: ja ?uturusa mi
(幽霊 は 恐ろしい か)
- ?ja: ja kytʃisa mi
(あなたは 苦しい か)
- t{u: ja ?atʃisa gisan ja:
(今日 は 暑 そう ね)
- t{u: ja ?atʃisa
(今日 は 暑い)

また [ja] (は) には前の語の [i] と融合し [e:] になる用例がある。

- ?ure: ma:ko: ne:n
(これは 美味しく ない)
- ?are: ?mbusa gisan ja:
(あれは 重 そう ね)
- ?ure: gassaru nimutʃi ja ssa:
(これは 軽い 荷物 である さ)
- kure: mutʃikasa gisan ja:
(これは 難し そう ね)
- ?ure: ?uturusa ssa:
(これは 恐ろしい さ)

- ?atʃimai ni tʃi n ?areː heːku keːin
(集まり に 来て も あれは 早く 帰る)

また、前の語が [-a] の場合は [j] が脱落し、[aː] となる。

- kumaː ?uturuʃiː tʃkuma roː
(ここは 恐ろしい 処 だ)

さらに、前の語が [-u] の場合は [j] が脱落し、[oː] となる。

- ?anu ttʃoː ?uttu nu gutu ʃi nːtʃoːn
(あの 人は 弟 の ように して 見ている)

VI 連体助詞

連体助詞としては、次のようなものが認められる。

- (1) [ga] 「の」(連体修飾)
- (2) [nu] 「の」(連体修飾)

両助詞とも体言と体言を修飾と被修飾の関係で結び付けることを本質的な職能とする。

(1) [ga] 「の」(連体修飾)

[ga] は格助詞の [ga] と同様、人称代名詞や体言の中でも人名などに後接し、それを後続の体言に結び付ける。意味上は所有・所属関係を表す場合が多い。

(承ける形式)

体言

- ?undʒu ga mua
(あなた の もの)
- kuri ja ?mːmeː ga mua
(これは お婆さん の もの)
- kuri ja jattʃiː ga mua
(これ は お兄さん の もの)
- ?uri ga mun ja sa
(それ の 物 である さ)
- makateː ga tʃinoː ?anʃi tʃurasaru
(マカテー の 着物は あんなに 美しいことよ)

(後接する形式)

体言

- ?ari ga naːka ŋkai ?a sa
(あれ の 中 に ある さ)
- tai ga naːka
(二人 の 中)
- taːtʃi ga ?uttu
(二つ の 年下)

• ku:mi ga tʃino: ʔanʃi tʃurasaru

(クミコ の 着物は あんなに 美しいことよ)

[ga] はⅢ格助詞の項で述べた通り格助詞としての職能のほか連体助詞として連体修飾の職能をも有する。また人称代名詞を承ける「の」は以下のように省略されることが多い。

• wa: mua

(私 (の) もの)

• wan tamaʃi

(私 (の) 分)

• ʔja: mua

(君 (の) もの)

(2) [nu]「の」(連体修飾)

[nu] も格助詞の [nu] と同様、普通名詞などに後接し、それを後続の体言に結び付けるのが本来の職能である。結び付けられた体言と体言の意味関係は両体言の表す意味により多様である。

(承ける形式)

(a)体言

• wanne: ja: kʷa nu kʷtu baka:n ru ʔumuto:ru
(私はね 子供 の こと ばかり ぞ 思っているのだ)

• ʔuja nu kutu ga ʔumaira natʃo:n
(親 の こと か 思うのか 泣いている)

• tʃu: nu katimuno: wa: ga ni: busan
(今日 の おかずは 私 が 煮 たい)

• mu:tʃi: nu ʃitʃi ni ru ʃi:saru
(鬼餅 の 時季 に ぞ 寒いのだ)

(b)副助詞

• katatʃi baka:n nu ʔujuwe: san
(形 ばかり の お祝い した)

• kunu hanaʃe: kuma ʔuto:ti baka:n nu hanaʃi jan do:
(この 話は ここ において だけ の 話 である ぞ)

(後接する形式)

体言または体言に準ずる語

• ʔanu ttʃo: ʔuttu nu gutu ʃi n:tʃo:n
(あの 人は 弟 の ように して 見ている)

• nama nu ju: ja ju:ri: jaka: ttʃu ru ʔuturusaru
(今 の 世 は 幽霊 よりか 人 ぞ 恐ろしいのだ)

• ʔama nu ja: ja ʔuʃttʃu kara warabi mari datte:n wun do:
(あそこ の 家 は 大人 から 子供 まで 沢山 居る よ)

- kuri ?i:ti nu muno: ne:n
(これ 以上 の 人は いない)

また人称代名詞の後の [nu] (の) は省略されることが多い。

- ?ja: kɯtu ?umuin do:
(あなた こと 思う ぞ)

[nu] [ga] は格助詞としての職能のほかに連体助詞として連体修飾の職能をも有する。これが前島方言の特徴である。また、このような現象は琉球方言の多くで見られ、現代共通語のそれとは様相を異にする。

- na: tʃui nu jikiga mari ?anu jinagu n:tʃo:n do:
(もう 一人 の 男 まで あの 女 見ている ぞ)
- te:buru nu ?i: ŋkai ?utʃo:ke:
(テーブル の 上 に 置いておけ)
- ki: ŋkai tui nu ʃi: baka:n ru ?a ssa:
(木 に 鳥 の 巣 ばかり ぞ ある さ)
- ?uruku nu ?m:me: tu gunum me: ni ?a:tan
(小禄 の お婆さんと 五年 前 に 会った)
- kane: handito: tin ru: nu ?uja baka:nno: wakaje: sani
(痴呆症になって ても 自分 の 親 ばかりは 分かる でしょう)
- jambaru nu ?m:me: me: ŋkai ?ndʒa kutu jurukuro:tan
(山原 の お婆さん 前 に 行った から 喜んでた)
- nama: du: nu warabi ru jubun do:
(今は 自分 の 子供 ぞ 呼ぶ ぞ)
- ?anu warabe: me: nu karadʒi n tʃi: kyʃi n tʃi:n
(あの 子供は 前 の 髪 も 切るし 後 も 切る)
- ?uja nu kutu ju: ?umui busan
(親 の こと よく 思い たい)

VII 接続助詞

接続助詞としては次のようなものが認められる。

- (1) [ne:] 「と」 (一般条件及び原因・理由)
- (2) [ʃiga] 「けれども」 (逆接条件)
- (3) [munnu] 「ものを」 (逆接条件)
- (4) [gana:] 「ながら」 (共存)
- (5) [kara] 「から」 (順接の原因・理由)
- (6) [-i] 「て」 (順接の原因・理由)
- (7) [tia] 「ても」 (逆接条件)
- (8) [ʃi:ti] 「ごと」

(9) [mama]「まま」

接続助詞は表現内容と表現内容を時間的前後関係や条件と帰結（原因と結果を含む）などで結び付ける働きがある。

(1) [ne:]「ば」(条件)

活用語の未然形に後接して、順接の仮定条件を表す。

(承ける形式)

活用語の連用形

- n:dʒi ne: wakain
(見れ ば 分かる)
- de: nu takasai ne: ko:iru
(代金 が 高けれ ば 買うのだ)
- wa: ga katʃi ne: ?ja: n:de:
(私 が 書け ば あなた 見ろ)
- jumi ne: naran do:
(読め ば ならない ぞ)

(後接する形式)

(a)活用語の終止形・duの結び形・未然形

- n:dʒi ne: wakain
(見れ ば 分かる)
- de: nu takasai ne: ko:iru
(代金 が 高けれ ば 買うのだ)
- jumi ne: naran do:
(読め ば ならない ぞ)

(b)体言

- wa: ga katʃi ne: ?ja: n:de:
(私 が 書け ば あなた 見ろ)

(2) [ʃiga]「けれども」(逆接条件)

活用語に後接し、次のように用いられる。

(承ける形式)

活用語の準体形

- n:dʒu ʃiga wakaran
(見る けれども 分からない)

(後接する形式)

(a)活用語の未然形・接続形

- nagasa: ?a ʃiga turukan
(長い けれども とどかない)
- hana n wi:ta ʃiga kariti ne:n
(花 も 植えた けれども 枯れて ない)

(b)体言

- wannin ?itʃi busaː ʃiga maru nu neːn
(私も 行き たい けれども 暇 が ない)

(3) [munnu]「ものを」(逆接条件)

活用語を承ける。多少の不満などの意を込めて前件を示し後件に逆接的に結びつける。

(承ける形式)

活用語の連体形

- takasaru munnu takakoːneːn di ?itʃi ?iːn naː
(高い ものを 高くない と 言う か)

(後接する形式)

活用形の未然形・連用形

- katʃuru munnu kakan di ?itʃi ?aimi
(書く ものを 書かない と 言って あるか)
- takasaru munnu takakoːneːn di ?itʃi ?iːn naː
(高い ものを 高くない と 言う か)

(4) [ganaː]「ながら」(共存)

動詞の連用形に後接し、二つの動作・作用が共存する関係にあることを示す。

(承ける形式)

活用語の未然形・連用形

- tʃaːgwaː numa ganaː hanaʃiːgwaː sana
(茶 飲み ながら 話 しよう)
- ʃigutu sa ganaː nuraːŋkeː
(仕事 し ながら 怒るな)
- ?itʃa ganaː tu keːi ganaː juia
(行き ながら と 帰り ながら 寄る)

(後接する形式)

(a)格助詞・係助詞

- ʃisa ga ?itʃa ganaː kara jamutan
(足 が 行き ながら から 痛かった)
- ?itʃa ganaː tu keːi ganaː juia
(行き ながら と 帰り ながら 寄る)
- ʃigutu sa ganaː ja nuraːŋkeː
(仕事 し ながら は 怒るな)

(b)活用語・接続形・終止形

- koːimun ʃiː ganaː ?ndʒikuː ʃiː
(買い物 し ながら 行って来よう ね)
- ?itʃa ganaː tu keːi ganaː juia
(行き ながら と 帰り ながら 寄る)

(c)体言

• ?ama ŋkai ?itʃa ganaː jeːdʒi sun
(あそこ に行き ながら 合図 する)

(5) [kara]「から」(順接の原因・理由)

動詞の接続形に後接し、原因・理由などの意を表す。

(承ける形式)

活用語の接続形

• kari kara ?itʃun
(食べて から 行く)

(後接する形式)

(a)活用語の終止形・連用形

• ʃinamunoː nːtʃi kara koːin
(品物は 見て から 買う)
• ?ari nːtʃi kara ?uturusa ssaː
(あれ 見て から 恐ろしい さ)

(b)体言

• ?ari ga ttʃi kara hanaʃeː sana
(あれ が 来て から 話は しよう)

(6) [-i]「て」(順接の原因・理由)

活用語を承け次のように用いられる。

(承ける形式)

• ʒi sa ga jari ?attʃeːjuː san
(足 が 痛んで 歩けない)
• ?ami nu ʔuti ?ndʒiraran
(雨 が 降って 出られない)

(7) [tia]「ても」(逆接条件)

助動詞に後接し、逆接の条件を表す。

(承ける形式)

助動詞

• kami busaː tiŋ kamaran
(食べ たく ても 食べれない)

(後接する形式)

活用語

• nindʒi busaː tin nindaran
(眠 たく ても 寝られない)

(8) [ʃiːti]「ごと」

体言を承け次のように用いられる。

(承ける形式)

体言および体言相当語

• ka: ʃi:ti kamua
(皮 ごと 食べる)

• ttʃu nu mun ʃi:ti ?arain
(人 の 物 ごと 洗う)

(後接する形式)

活用語の終止形

• ttʃu nu mun ʃi:ti ?arain
(人 の 物 ごと 洗う)

(9) [mama]「まま」

体言、活用語を承け次のように用いられる。

(承ける形式)

(a)体言

• ka: mama k'we:n
(皮 まま 食べる)

(b)活用語の連用形

• tʃinu n tʃi: mama ?umi ŋkai ?i:n
(着物 も 着た まま 海 に 入る)

(後接する形式)

(a)体言

• tʃinu n tʃi: mama ?umi ŋkai ?i:n
(着物 も 着た まま 海 に 入る)

(b)活用語の終止形

• ka: mama k'we:n
(皮 まま 食べる)

VIII 終助詞

終助詞としては次のようなものが認められる。

- (1) [do:]「ぞ」(強い念押し)
- (2) [na]「な」(禁止)
- (3) [gaja:]「かしら」(自問)
- (4) [mi]「か」(疑問)
- (5) [ga]「か」(疑問)
- (6) [ni]「か」(疑問)
- (7) [-i]「か」(疑問)

- (8) [ti:] 「～したか」(過去疑問)
- (9) [ba:i] 「わけか」(問い)
- (10) [ʃiga] 「けど」(不平・不満を込めた言いさし)
- (11) [mun] 「ものを」(不平・不満を込めた言いさし)
- (12) [ʃe:] 「でしょう」
- (13) [ja:] 「ね」(軽い念押し)
- (14) [ji:] 「ね」(聞き手の同意を求める)
- (15) [jo:] 「よ」(聞き手への訴え)
- (16) [te:] 「よ」(不確かな推測)
- (17) [na] 「よ」(問い)
- (18) [sa] 「さ」(断定)

終助詞は文末にあたって完結作用を表す。完結作用とは、文を文たらしめるもので、表現内容と、話し手との関係付けをするものである。

- (1) [do:] 「ぞ」(強い念押し)

動詞の終止形に後接し、強い念押しの意を表す。

(承ける形式)

活用語の終止形

- kuma ŋkai ʔan do:
(ここ に ある ぞ)
- kure: ʔiju ru jen do:
(これは 魚 ぞ である ぞ)
- wa: ga ʔitʃun do:
(私 が 行く ぞ)
- kure: takasan do:
(これは 高い ぞ)
- ʔatʃimai ni ttʃi n ʔare: he:ku ke:in do:
(集まり に 来て も あれば 早く 帰る ぞ)
- ʔari ga ʔitʃun ri ʔi:tan do:
(あれ が 行く と 言っていた ぞ)
- tʃirutʃan di ʔi:ru na: ru jan do:
(鶴ちゃん と 言う 名前 ぞ である ぞ)

- (2) [na] 「な」(禁止)

動詞の連体形に後接し、禁止の意を表す。また、終助詞 [jo:] を後接させる傾向がある。

(承ける形式)

活用語の未然形

- ʔuma ŋkai dʒi: ja kaku na jo:
(そこ に 字 は 書く な よ)

(後接する形式)

終助詞

- kasa nde: wa:i: na jo:
(傘 など 忘れる な よ)

(3) [gaja:] 「かしら」 (自問)

文末に位置して、自分自身に対して問いかける意を表す。

(承ける形式)

活用語

- kuri sa:ni {imu gaja:
(これ で よい かしら)
- kudʒo: jambaru kai ?ndʒa gaja:
(去年は 山原 に 行った かしら)
- ?anu warabi nu ru katʃu gaja:
(あの こども が ぞ 書く かしら)
- ?ama: ɸukasa gaja:
(あそこは 深い かしら)
- ?ama ŋkai wuʃe: ta: ja gaja:
(あそこ に 居るのは 誰 である かしら)
- kunu midʒe: dʒo:to: ja gaja:
(この 水は きれい である か)
- ?ano ttʃo: tʃu:ba: ja gaja:
(あの人は 勝ち気 である かしら)
- na: ?ndʒa gaja:
(もう 行った かしら)

(4) [mi] 「か」 (問い)

文末に位置して、相手に尋ね、問いかける意を表す。

(承ける形式)

活用語の準体形

- ?ja: ja ?atʃa: n tigane: ʃi kwi: mi
(あなたは 明日 も 手伝い して くれる か)
- matʃigwa: ni ?ja: ga ?itʃu mi
(市場 に あなた が 行く か)
- kunu midʒe: tʃurasa mi
(この 水は きれい か)
- ?ja: ja ku:mi: ru ja mi:
(あなたは クミコ ぞ である か)
- tigami katʃu mi
(手紙 書く か)

- jamatoː ʧiːsa mi
(大和は 寒い か)
- kunu midʒeː dʒoːtoː ja miː
(この 水は きれい である か)
- ?jaː ja tʃui saːni jambaru mari ?itʃi juːsu mi
(あなたは 一人 で 山原 まで 行 ける か)

(5) [ga]「か」(自問)

文末に位置して、疑問の意を表す。

(承ける形式)

活用語の準体形

- kureː taː ga katʃu ga
(これは 誰 が 書く か)
- ?jaː ja nuː soː ga
(あなたは 何 している か)
- kuri tu kureː dʒiru ga takasa ga
(これ と これは どれ が 高い か)
- warabi ga nuː wakai ga
(子供 が 何 分かる か)
- ?jaː ja nuː ʃin di ?iː ga
(あなたは 何 しろ と 言う か)
- ?jaː ja maː kai ?itʃun di ?itʃoː ga
(あなたは 何処 に 行く と 言っている か)

(6) [ni]「か」(疑問)

文末に位置して、相手対し物事を提案する意を表す。

(承ける形式)

活用語の未然形

- kuŋ gutu saraː maʃi ?ara ni
(この ように したら いい ではない か)

(7) [-i]「か」(疑問)

文末に位置して、相手に問いかける意を表す。

(承ける形式)

活用語の語幹

- naː ?jaː ja katʃiː
(もう あなた は 書いたか)
- naː ?ndʒiː
(もう 行ったか)

(8) [tiː]「～したか」(過去疑問)

文末に位置して、相手に問いかける意を表す。

(承ける形式)

活用語の準体形

- nama {igutu so: ti:
(まだ 仕事 していた か)
- jamato: ?at{isa ti:
(大和は 暑かった か)

(9) [ba:i]「わけか」(問い)

文末に位置して、表現内容を当然のこととして、聞き手へ訴える意味を表す。

(承ける形式)

活用語の連体形

- wa: ga wassaru ba:i
(私 が 悪い わけか)
- t{u: ja ?ari ga ?it{uru ba:i
(今日 は あれ が 行く わけか)
- kure: jassaru ba:i
(これは 安い わけか)

(10) [ʃiga]「けど」(不平・不満を込めた言いさし)

文末に位置する。接続助詞 [ʃiga] (けれども・のに) が終助詞化したもの。「～なのに～する」という意味を表し、希望や期待に反することが起こっていることに対する不満の気持ちの時用いる。

(承ける形式)

活用語の準体形

- nammaru ?uφita ʃiga
(今 ぞ 起きた けど)

(11) [mua]「ものを」(不平・不満を込めた言いさし)

文末に位置する。接続助詞 [munnu]「ものを」の後件が省略され、成立したものである。既述の [ʃiga] とほぼ同様に、主文の後件を省略し、多少の不平・不満を込めつつ言いさしにしたものである。活用語の連体形に後接する。

(承ける形式)

活用語の連体形

- ?uppi mare: jumi ju:suru mua
(たった これ までは 読める ものを)
- ?ure: nama wakasaru mua
(これは まだ 若い ものを)

(12) [ʃe:]「でしょう」

(承ける形式)

活用語の準体形

• ?ama kai ?m:me: ga ?it}u }e:
(あそこ に お婆さん が 行く でしょう)

• kure: takasa }e:
(これは 高い でしょう)

(13) [ja:]「ね」(軽い念押し)

様々な語に後接し、文末に位置する。軽い念押しや相手の同意を求める意を表す。
(承ける形式)

(a)活用語未然形・終止形

• ?ja: ja tu:t}i geŋki ?a ga sa }a:
(あなたは いつも 元気が ある さ ね)

• ta: ga ga ?uφu jassara }a:
(大人し そう ね)

• ma: ga }irasara }a:
(何処 が 涼しいか ね)

• ta: ga ga ju: hatarat}ura }a:
(誰 が か よく 働くか ね)

• ?ukasa nu ru waraira }a:
(可笑しい のぞ 笑うのか ね)

• ?anu tt}o: t}urasan }a:
(あの 人は きれい ね)

• ?uφujassai gisan }a:
(大人し そう ね)

(b)終助詞・係助詞

• ta: jami}e: ga }a:
(誰 でいらっしやる か ね)

• ti:sa:d}i ja ma: ja ga }a:
(手拭い は 何処 である か ね)

• t}ire:kuni ŋ kami jo: }a:
(人参 も 食べなさい よ ね)

• ?ja: sat}i ni jiri jo: }a:
(あなた 先に 坐りなさい よ ね)

• magisaru ?iju turi jo: }a:
(大きい 魚 取りなさい よ ね)

• ?ja: ŋ ko:ri jo: }a:
(あなた も 買いなさい よ ね)

• ju: ?umuri jo: }a:
(よく 思いなさい よ ね)

- ?anu waraba: ja ja: bo:}i ŋ kandʒui ?ut}ɥkui ŋ kandʒua
(あの 子供 は ね 帽子 も 被るし 頬かむり も 被る)
- nama ja ja: ?ut}ɥkui ru kunt}o:n do:
(今 は ね 頬かむり ぞ 括っている のだ)
- tt}u ŋkai ja ja: ?i: kytu ru ?i:n do:
(人 に は ね よい こと ぞ 言う のだ)

(14) [ji:] 「ね」 (聞き手の同意を求める)

動詞の未然形 (志向形) に後接し、聞き手の同意を求める意を表す。

(承ける形式)

活用語の未然形 (志向形)

- wan ji: ja kaka ji:
(私 絵 は 書こう ね)
- waŋ kɥsa: kara ji:
(私 草は 刈ろう ね)

(15) [jo:] 「よ」 (聞き手への訴え)

文末に位置し、表現内容を聞き手にやわらかい調子で伝えたり、訴えたりする。

(承ける形式)

活用語の命令形・終止形

- ?ja: kaki jo:
(あなた 書きなさい よ)
- ?ure: takasan jo:
(これは 高い よ)

(16) [te:] 「よ」 (不確かな推測)

(承ける形式)

活用語の終止形

- ?ari ga kat}un te:
(あれ が 書く よ)
- ?are: takasan te:
(あれは 高い よ)
- magi: naine: ?uɥuja}iku nain te:
(大きく なれば 大人しく なる よ)

(17) [na] 「よ」 (問い)

動詞の未然形 (志向形) に後接し、呼びかけの意を表す。

(承ける形式)

活用語の未然形

- mandʒun hataraka na
(一緒に 働こう よ)

- mandʒum matʃigwaː ŋkai ʔika na
(一緒に 市場 に 行こう よ)
- mandʒun ʃi kuːga na
(二人 で 漕ごう よ)
- ʔwiː kara mandʒun tuba na
(上 から 一緒に 飛ぼう よ)
- wan tʃitʃima na
(私 包む よ)
- mandʒuŋ kama na
(一緒に 食べよう よ)

(18) [sa] 「さ」 (断定)

文末に位置し、軽く断定する意を表す。また [saː] [ssaː] の例も見られる。

(承ける形式)

活用語の準体形・終止形

- naː ʃimu sa
(もう いい さ)
- kiː ŋkai tui nu ʃiː bakaːn ru ʔa ssaː
(木 に 鳥 の 巢 ばかり ぞ ある さ)
- taː n wuran sa
(誰 も いない さ)

6 まとめ

以上、前島方言のⅠ準体助詞、Ⅱ並列助詞、Ⅲ格助詞、Ⅳ副助詞、Ⅴ係助詞、Ⅵ連体助詞、Ⅶ接続助詞、Ⅷ終助詞についてその承ける形式および後接する形式について見てきた。その結果は以下に示す通りである。

- Ⅰ 準体助詞は、活用語を承け、並列助詞・格助詞・副助詞・係助詞に後接する。
- Ⅱ 並列助詞は、体言・副助詞・準体助詞を承け、体言・活用語に後接する。
- Ⅲ 格助詞は、体言・準体助詞・副助詞・格助詞・活用語を承け、体言・活用語・係助詞に後接する。
- Ⅳ 副助詞は、体言・活用語・格助詞・副助詞・副詞を承け、体言・活用語・格助詞・係助詞・連体助詞に後接する。
- Ⅴ 係助詞は、体言・活用語・格助詞・副助詞を承け、活用語に後接する。
- Ⅵ 連体助詞は、体言・副助詞を承け、体言に後接する。
- Ⅶ 接続助詞は、体言・活用語・助動詞を承け、体言・活用語・格助詞・係助詞に後接する。
- Ⅷ 終助詞は、活用語・係助詞・終助詞を承け、終助詞に後接する。

琉球方言の格助詞・連体助詞の「ガ」「ノ」が、その承ける形式を異にすることはすでに

明らかである。この「承ける形式」による分類方法は、助詞を考察する上で有効であると考えられる。加えて「後接する形式」との関係についても明らかにする必要性を感じ、本稿では「承ける形式」と「後接する形式」に着目し、助詞を分類した。このような資料の整備から見えてくる諸問題について個々の助詞を対象に考察を試みる予定である。本論考は資料提示と分類に中心を置いた経過報告である。

主要参考文献

- 内間直仁 1983 「沖縄本部町瀬底方言の助詞」『琉球の方言8』
法政大学沖縄文化研究所
- 内間直仁 1994 『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院
- 内間直仁 1996 「琉球方言から見た助詞<が><の>の変遷」
『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点』
明治書院
- 大野 晋 1987 『文法と語彙』岩波書店
- 時枝誠記 1954 『日本文法 文語篇』岩波書店
- 野原三義 1983 「沖縄県国頭村辺野喜方言の助詞」『琉球の方言8』
法政大学沖縄文化研究所
- 野原三義 1998 『新編 琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所
- 橋本進吉 1969 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文館
- 渡辺 実 1974 『国語文法論』笠間書院
- 拙 論 1998 「沖縄北部方言における助詞<が><の>の考察」『語文論叢第26号』千葉大学文学部国語国文学会
- 拙 論 1999 「沖縄県辺野喜方言の助詞（一）」『社会文化科学研究 第3号』
千葉大学大学院社会文化科学研究科

(あらかき くみこ・千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程)

